

れき ぶん

となん歴史民だより vol.17

Morioka tonan history and folklore museum

平成20年12月24日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228

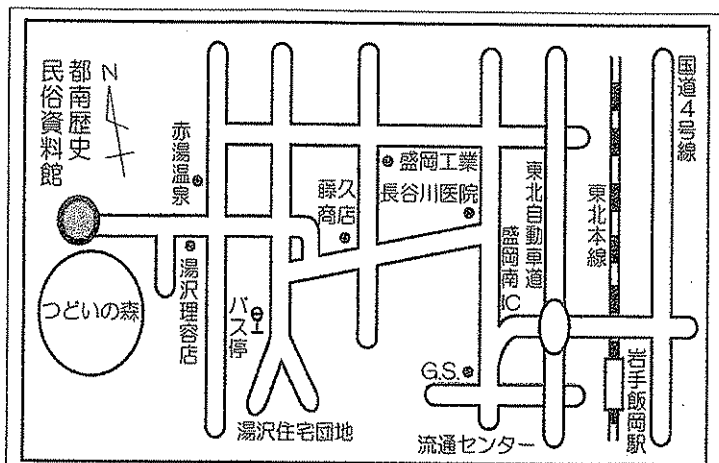


「史跡・文化財巡り」の御所野縄文公園見学風景

— もくじ —

- ・〈寄稿〉古文書を読み解く楽しさ
- ・盛岡藩領内に伝わった『たとえ』①
- ・報告 特別企画展
史跡・文化財巡り
市民参加展
- ・資料は語る①
- ・盛岡市所在指定文化財紹介①
- ・となんの昔ばなし①

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
- 年末年始

<寄稿> 古文書を読み解く楽しさ

滝沢村古文書サークル さわらびの会講師 藤澤 昭子

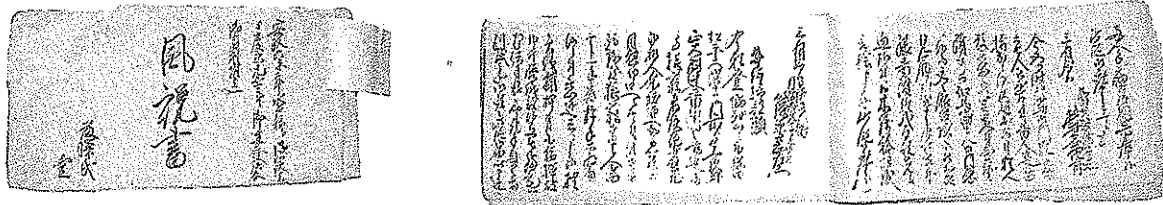
今回は、滝沢村古文書サークルさわらびの会講師の藤澤昭子氏から、当館所蔵の古文書『風説書(ふうせつがき)』について寄稿いただきました。

盛岡市都南歴史民俗資料館に所蔵されてある三重家文書より『安政六年水戸様江御沙汰書より慶応元年御進発供養御名前附迄 風説書』をこの4月より滝沢村の古文書サークルで解説テキストとして読み始めました。

『風説書』とは、時事情報をまとめたもので、「聞き書」、「見聞録」、「風聞書」として、幕末期に流行しはじめました。瓦版は幕府の規制が強かったが、この風説書の類は、筆写本として次から次へと手書きによる写しで広まりました。写しの段階で誤字、脱字なども見られるようですがテレビ、新聞のなかった時代に、広まりをみせたこの情報収集と写しの作業には脱帽します。

時の大老・井伊直弼が安政五年(1858)から翌年にかけて、尊王攘夷運動派らに下した弾圧事件、いわゆる「安政の大獄」の処罰者名列記から始まり、慶応元年(1865)の長州征伐のため14代将軍家茂(いえもち・幼名 慶福)が江戸を出発した時のお供の名前が列記してあります。

「篤姫」のドラマにあわせて幕末の刻一刻と国内外ともに急変していく様子が伝わってきて当時の史実を解きあかす意味で興味深い資料となっています。さて、どこまで解説できるやら。会員の根気が試される資料です。



『風説書』(当館所蔵)

盛岡藩領内に伝わった「たとえ」① 「伝馬(でんま)のなき前(め)エ」

昔からの「ことわざ・たとえ」は、読み書きのできなかった農民・庶民を対象に「口伝え」という言葉によって伝承されてきました。この「たとえ」のなかには、その地方独特の風土と土地柄をもった、面白いたとえが見られます。

江戸時代、盛岡城から地方の代官所に藩の荷物を運ぶ時は、人力や馬の背によって集落から集落へと、次々と送り渡し、目的地へ運び込みました。この際の送り継ぎ役は順番制の当番が、どの集落でも決まっていた。この役は無報酬でしたが、荷が到着すると雨・風・雪をいわず、何をおいても直ぐに送り継ぎしなければ、藩より痛いおしかりを受けました。盛岡から宮古に通ずる当時の閉伊街道筋の人々にとっては、耐え難い諸役の一つでありましたから、これを「伝馬のなき前エ」と呼んでいやがりました。

このことから、《泣きたくなるほど、つらいこと》の「たとえ」として言われるようになったということです。

参考・引用資料：『北東北のたとえ』毛藤勤治 編著 岩手日報社

報 告

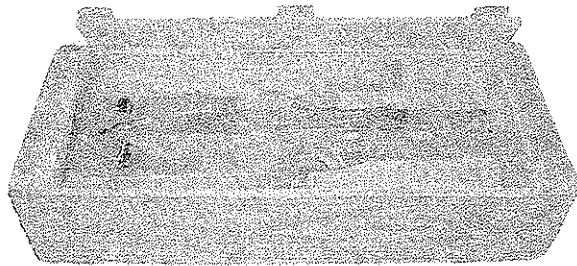
9月2日～9月30日

平成20年度特別企画展

「匠の手仕事道具展」

今年度の特別企画展は「匠の手仕事道具展」と題し開催しました。大正から昭和初期に作られ使用された大工道具、約200点を展示しました。

小学生から年配者までたくさんの見学者が訪れ、人と道具との関係を再確認する良い機会になりました。



大工道具

9月30日

平成20年度史跡・文化財巡り

「北緯40度以北の歴史文化探訪」

当館で毎年実施している史跡・文化財巡りは、今年度は玉山地区をスタートし、岩手町、一戸町、二戸市を巡るルートで実施しました。

当日は、天候にも恵まれ、普段訪れる機会の少ない史跡や文化財を巡り、とても有意義な1日になりました。また、講師の山田小八郎氏（盛岡市歴史民俗資料館運営委員長）の説明も分かりやすくとても好評でした。



朴館家住宅

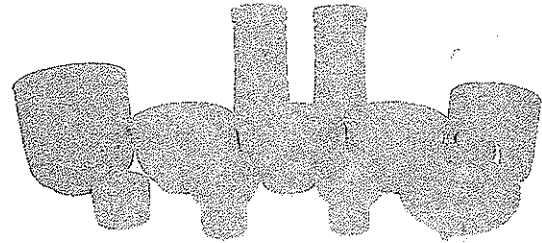
10月8日～10月31日

市民参加展

「岩手の風物絵皿展」

「岩手の風物絵皿展」は、今年度3回目の市民参加展として鎌田 隆さん（盛岡市天神町）のコレクションを紹介しました。

今回の展示会では、岩手焼や臺焼をはじめ、県内出身の画家や著名人が県内の風物を絵付した皿など約100点を紹介しました。多くの見学者が訪れ、郷土の文化と身の回りの生活文化に関心をもつ良い機会になりました。



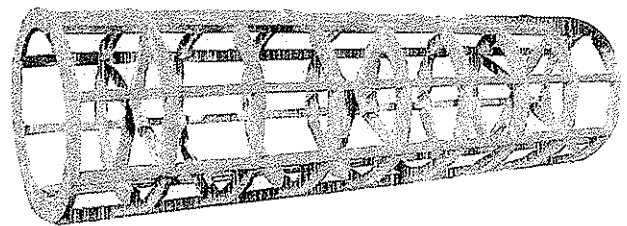
岩手焼

資料は語る

⑰ころがし

当資料館の収蔵資料をひとつ取り上げて紹介します

代かきの後、田んぼで転がして苗を植える目印をつける道具です。昭和10年頃から40年頃まで使用されていました。



参考・引用資料

「稲作における農機具の変遷」

農林水産技術会議事務局 1990

市指定史跡

一字一石一札供養塔

(いちじいっせきいちれいくようとう)

昭和48年2月16日指定 盛岡市玉山区



安永7年(1778)、岩手町川口にある明円寺(みょうえんじ)の十四世実秀(じっしゅう)和尚によって、飢餓による餓死者を供養するため建立されました。

供養塔の下からは、文字の書かれた小石が多数発見されました。これらの小石は、法華経(ほけきょう)の経典を1つの石に1文字ずつ書き写したもので「経石(きょうせき)」と呼ばれるものです。



経石

参考・引用資料

盛岡市教育委員会 『もりおかの文化財』 2008

玉山村教育委員会 『玉山の文化財』 2003

となんの昔ばなし⑩

『遠眼鏡森(とおめがねもり)』

乙部城といわれていたところの北方に小さな丘があります。

地元の人たちは遠眼鏡森と呼んでいます。天正年間(一五七三年〜一五九二年)、南部信直が乙部城を攻めるとき敵状偵察のために、この丘の上から遠眼鏡を持って展望したので、この名がついたと伝えられています。

この丘にのぼって見ると、北上平野が広々と眼下に見え、北上川が悠々と流れて見晴らしがよいところです。

五月五日は節句の日であり、一般の農家などでは昔から休日になっていたのですが、この集落の家々では休むということがありませんでした。「乙部節句」は、九月九日で乙部城落成の記念日にちなんで生れた風習であると伝えられています。

出典『となんの民話』(都南歴史民俗資料館)